

地球の話から始めましょう。

何も存在しない状態から、突然のビックバン（大爆発）によって宇宙が形成されたのが、150 億年前だとしております。（学問の仮説と聴いて下さい）ビックバンから 1 億年経った頃、水素とヘリウムガスからなる宇宙物質は、無数の巨大な雲を作り、その中で無数の恒星と銀河群が生まれ出され、その間にあるガスやチリからなる星間雲が漂い、衝突を繰り返す光のない暗黒ガス雲です。

その様な巨大なガス雲の 1 ッが、遠くの何かの爆発でおきた衝撃波を受けてゆっくりと回転を始めると、その力によって収縮を開始、そうすると自分の重力が出来る、自分の重力で中心部に向かって加速度的に収縮して、大きなガス雲が収縮を始めると回転円盤の中心が数百万年たつと密度が高くなり、不透明な高温の核が生まれ、やがて輝き始めると暗黒の世界に光が輝きだし、原始太陽が出現した。

原始太陽の赤道（中心線）に沿って広がっているガス雲の円盤が回転しながら収縮を続け無数の塊が回転運動をしていると、原始太陽を中心とした円盤リングから 0.6 億 km、1.1 億 km、1.5 億 km、2.3 億 km のような点が一種のポケットの様な特異点になって周辺の微惑星である無数の塊が集まってきて衝突を繰り返し、やがて 1 ッの惑星が形成された。

0.6 億 km に形成されたのが水星、次が金星、1.5 億 km に形成されたのが原始地球という巨大なガス体です。次が木星の順になります。

太陽は約 55 億年前、それを取り巻く太陽系（惑星）は 46 億から 45 億年前に形成されました。

原始地球は数千万年かかって直径 2000km 位に成長したが、未だ微惑星の集合体ですが中心部は回りからの圧力で摩擦熱を生じ温度が上がり始め、微惑星に含まれているウランなどなどの放射元素も圧力のため密集し、原子核同士が核反応を起して発熱する。

更に原始地球の表面には無数の微惑星が降り注ぎ、高速で激しく衝突をするから猛烈な摩擦熱を発し、原子地球全体が溶融した燃えたぎるマグマの状態になり、表面はマグマの海になった。

そうすると後から衝突してきた微惑星はどろどろに溶けてしまい、原始地球の一部となる。そうすると比重の大きい鉄やニッケルのような成分は小さな滴のようになって中心部に沈み込み、この成分が原始地球の核になる。

鉄といっても固体ではなく、溶鉱炉のどろどろに溶けた鉄分です。現在の地球でも内部はどろどろに溶けた核で其の周りをマントルその外側をマグマで囲んでいます。

一方、表面には軽いガス成分や水蒸気が泡となって上昇し、表層から絞り出され、原始地球の周りを包むようにして存在し、これが原始大気を形成します。

